
ノンフィクション・タバスコサイドショウ

シラカベヒロ氏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノンフィクション・タバスコサイドショウ

【Nコード】

N4132N

【作者名】

シラカベヒロ氏

【あらすじ】

『調味料に生まれ変わるとしてもタバスコにだけはなりたくない』とかどうでもいいことばかり考えちゃってのろのろしか疾走できない少年少女の現実逃避ロードムービー。

もう壁しか見えない壁の町

大きな壁があるっていうのは往々にして比喩的に使う言葉だけど僕の町にはリアルに大きな壁がある。壁にぐるっと囲まれている。

大きさは、僕の町にはそれ以上大きいものがないので「○○ぐらい」と例えようがないのだけど、とりあえず数字で言えば高さ九百九十九メートル。一キロにしなかったのには、きっと何か作った人の意図があるんだと思う。誰が作ったか知らないけど。あと、全長も知らない。知ってることは、ただぐるっと町を囲んでるということだけ。十分だ。それだけ知ってれば、この町で暮らすには十分。そういう町と、僕だった。

で、別にそんな話はどうでもよくて。

大事なのは、壁の向こうからやってきた見世物小屋だ。

僕の町では、夏、大きな祭があって、それには必ず毎年、見世物小屋が建つ。真っ黒い夜の闇の中、垂れ下がる赤と白の布、薄ぼんやりした橙色の灯り。よくわからないけど悲しい物語を描いてるのとだけわかる何枚もの飾り絵。ほっといたら永遠に喋り続けるんじゃないかと思うような呼び込みのおじさんのしゃがれ声。

「さあ入った入った御代は見てのお帰りだよ世にも珍しい何々云々」
そして、ここが個人的には大事なんだけど。

毎年、見世物の内容は違う。

覚えてる範囲で言うと、去年はタコ女、一昨年はカニ女、一昨々年はヘビ女。ほげほげ女っていうのがどうやらこの世界のスタンダードらしい。

「父母に捨てられ山の中、わが子を亡くしたオオカミに、愛娘として育てられ、自分を獣と思い込む。人語は話せぬ、立って歩けぬ、世にも悲しき美しき、オオカミ女、オオカミ女」

今年はおオカミ女。

正直、過去三年と比べるとパンチが弱いと思う。でも、僕は中に入った。今まで外から眺めるばかりで一度も入ったことはなかった。いつも祭には家族と来ていたのだけど、今年は初めて一人きりで、だから入ってみた、そんな感じだった。

垂れ幕を捲ると、軽く勾配になった段々の床と、そこに数列、ずらり並べられた座布団。とりあえず、二列目の真ん中らへんに座った。目の前には舞台。文化祭の簡易野外ステージみたいで、安っぽい。そのセンターどまん前に、濁った水の入った一升ビンがあった。横に注意書きが立てかけられている。目をこらす。

【これがオオカミ女の赤ん坊です。】

墨で書かれた達筆な文字。これってどれだろう、と思ったけど多分ビンのことだと思い、更に目をこらす。ぷかぷか、濁った水の中に何かが沈んでるのがわかった。小さい、丸まった生き物。ねずみ？ よく見えない。立ち上がり、近寄ろうとした。

じりりりじりりりじりり。

バカでかいベルの音が小屋中に鳴り響いた。慌てて座布団に戻り、座る。というか、僕以外誰も入ってない。小屋の外にはそこそこ人がいたのに、みんな入って来なかった。なんだか裏切られたような不安。

ずばっ、と舞台奥の垂れ幕が乱暴に捲れた。思わず目をやる。

女の子だった。

僕の高校のではない制服を着ていた（町の外から来たんだし当たり前だけど）。白いセーラー服、大きな赤いネクタイ、やたら短いスカート。全体的に土ぼこりとか染みで汚れていた。でも肌は汚れ一つなく真っ白だった。すたすた舞台中央へ歩いてくる。

短めの髪。肩にかかるくらいの長さ。寝起きみたいにボサボサしていてところどころツンツンはねていた。そして大きな目。鋭く尖って変にぎらぎら光っていた。

ひっくるめて、オオカミっぽい女に見えないこともなかった。

「はいじゃあやります」

あからさまにやる気のない、平坦な声。というか人語喋った、この子。あと普通に立って歩いてる。とか考えていると。

くるっ、どん。くるっ、どん。くるっ、どん。

彼女は三連続で大きなバック宙をかました。あっという間の出来事。そしてあまりに急だった。わけもわからない。とりあえず、スカートの中が思いっきり見えた。スパッツ的なものを履いてた。色々、呆氣にとられた。

跳び終えた彼女は、ぺこりと舞台女優のように仰々しくお辞儀をしてみせた。それに全く反応出来ず黙りこくっていると、彼女は顔を上げ僕を見て「拍手」と要求してきた。それこそオオカミみたいに低い声。恐る恐る、ぱんぱんとゆるい拍手をする。彼女は要求したわりに特に反応もせず、嬉しそうな顔もせず、そそくさと幕の陰からなにやら取り出した。ぎらぎら光る小さなナイフ、三本。

「はいじゃあやります」

抑揚のない声と共に、彼女はひゅんひゅんとジャグリングを始めた。上手かった。あんなに尖ってよく切れそうなのに、それを恐れることもなくまるでただのお手玉のように鮮やかに「いって!」かちゃん。

ナイフが一本、舞台に落ちた。残る二本は彼女の手に。

ちっ。大きく舌打ちをし、落ちたその一本を、彼女は思い切り前方に蹴り飛ばした。つまり僕のいる客席に向けて。「あぶな!」慌てて腰を浮かす。飛んだナイフは、僕の三つ隣の座布団に鋭い鋭角で突き刺さった。もしそこに座ってたら、ちょうど股間らへんに刺さってたかもと想像して、自分でも引くぐらい背中汗をかいた。

舞台を見ると、彼女はなんにも気にせず背を向けて、黙々と次の準備をしていた。くるっと振り向く。その手には、大きな林檎と小さな拳銃。

「お客さんの中で、この林檎を頭に乗つけてくれる人いませんか」周りを見る。僕しかいない。舞台を見る。僕しか見てない。

「来いよほら」

鋭い目線と低い声。こっちに差し出す彼女の手には林檎。しぶしぶ僕は腰を上げ、なんて出来るわけもなく、ただ彼女から目をそらし、聞こえてないふりをした。途端。

ばん。

僕の一つ隣の座布団から綿が飛び散った。ふわふわ舞う綿くず。舞台を見る。にこにこ笑う彼女と目が合った。動けなくなる。彼女の握る銃がいつの間にか僕を向いていた。林檎乗せてないのに。笑う彼女の口元からぎろつと覗く尖った八重歯。あ、この子ほんとにオオカミかも『林檎をかじって歯から血が出ると歯茎が弱いなんて言うけどあれは詭弁だ。林檎が半端じゃなく固かったという可能性をなぜ考えないのか。果物の固さなんて一律だと思っている人間のエゴイズムを僕はそこに感じる。林檎が喋れないのを良いことに』じりりりりりじりりりり、じり、じりり。

鳴り響くベルの音に、我に返る。どうやら終わりの合図らしかった。

舞台上の彼女は軽くお辞儀をして、さっさと奥へ歩き去り、垂れ幕を捲って中へ消えた。ふは、と自然に息が漏れた。とりあえず、僕も出よう。入ってきたほうと逆、向かって左側の垂れ幕が出口らしく、幕の上に大きく出口と書いてあるのが見える。ふらふら立ち、ふらふら歩きながら、それを捲り、外へ出た。

「はい二千円」

出てすぐ、脇で待ち構えていたおじさんがにゅつと手を出してきた。心の中のもやもやをここぞとばかりに吐き出してやろうと思ったのだけど、あまりに言いたいことが多過ぎて何をどこからどう言えばいいかわからず、結果、僕は無言で二千円払い、見世物小屋を後にした。

「またどうぞー」

背後からおじさんの声。誰が来るか。

次の日。僕はまた来た。

次の日だけじゃない。その次も、その次も、祭が終わる日まで、期間にして実に一週間、僕は毎晩見世物小屋に通い詰めた。舞台にはいつも彼女がいて、初めて見たときと何も変わらず、毎日同じ制服を着て、やる気なさげに演目をこなしていた。お客の数はまばらだったけど、僕以外誰もいない回というのは初日以来二度となかった。

祭の最終日。僕は最前列のど真ん中で彼女を見た。
じりりりりり、じりりりりりりりりりりり。

終演のベルがけたたましく鳴り、彼女がすたすた舞台奥へ去り、僕が少しでも名残惜しさを感じ、舞台をぼおっと見ていたとき。

「あ、ね。外で待ってて」

彼女が奥の幕からひょいと首だけ出し、はっきり僕を見てそう言った。

「え？　僕？」

と訊いた頃には彼女はもう首を引っ込めていた。もう一度訊こうとしたけど、他のお客の波に押されて（この回はびっくりするほど大入りだった）僕は小屋の外へ吐き出されてしまった。

それで、とりあえず、言われたとおり外で待った。小屋から数メートル離れたぐらいの場所で、何時間か待った。祭囃子がトーンダウンし、辺りから人がぼろぼろ消えて、完全に祭が終わっても、待った。ずっと立っていたので少し足がびりびりしていた。

突然、ぶつんと見世物小屋のほの赤い明かりが消えた。そしてすぐ、薄暗い蛍光灯照明に変わり、とんかんと小屋の中から何やら作業する音が聞こえてきた。ああ、撤収準備だとすぐにわかり、ほんとに今日でおしまいなんだとうっすら思う。この人たちは明日には壁の外に行ってしまうんだ、と考えて、そこでようやく僕はぺたんと地面に座り込んだ。座り込んでしまった。

小屋から、人影が出てきたのがぼんやり見えた。少しずつ影が大きくなる。目の辺りがぎらぎらしてるように見えて、それが彼女だとわかる。座ったばかりだったけど、のろのろ立ち上がった。制

服姿のままの彼女が、僕の目の前にやってくる。舞台上で見たときより背が小さく見えた。

「おうお待たせ。じゃ行こ」

それだけ言うのと彼女はさっさと歩き出した。まともに喋ったことなんてないのに、やたら親しげだったので呆氣にとられた。とられている間にぐんぐん歩いてどこかに行ってしまう彼女を、僕は慌てて追った。

「もしもし、父さん……あ、うん、僕。えと、ちょっと友達と会ってて、遅くなると思う、帰るの。……うん、ごめん、なんか……ありがとう。それじゃあ、うん。おやすみ」携帯を切る。目の前を見る。和風ハンバーグ定食、サイコロステーキ二百八十グラム、ハヤシライス、とんかつ御前、ピザ二枚、ごま味噌担々麺、ポテトフライ、生ビール中ジョッキ。

僕の向かいに座る彼女は、それらをひたすら口に押し込み、噛んで飲み込んでいった。僕は、ドリンクバーで取ってきたメロンソーダを飲みながら、ぼーっとその光景を見ていた。

彼女が向かったのは、祭の会場すぐ近くのファミレス、つまり今いるここだった。時間は深夜0時過ぎ。他にもお客はちらほらいた。みんな祭の帰りに寄った感じらしかった。店内全体、プール授業の後みたいなの、なんとなくくだるい雰囲気だった。そんな中、彼女は目の覚めるようなアクティブさで飲み食いしていて、実際僕はそれを見ていて結構目が覚めた。

「んで、あんた、なに？」

ごま味噌担々麺を空にしたところで、彼女は僕にそう言った。それから、げふうと大きくげっぷをした。

こっちが色々訊きたかったのに逆に質問され、しかもその内容があまりにぎっくりしててわけがわからなかったので、とりあえず「高校生です、一年生」と返答した。

「高校生の前は、見世物小屋が好きなのか、それともあたしが好

きなのか」

そう言って、彼女は中ジョッキを掴み傾けぐいぐい飲んだ。僕は戸惑った。どっちでもなかったからだ。何も言えず黙っていると、彼女はジョッキをとんと置いて身を乗り出し、僕を見つめてきた。

「あんた名前は？」

「あ、えっと」

「タバスコでいい？ あんたの名前」

「は？」

彼女は脇にあったタバスコのビンを掴みひねり開け、どぼどぼピザにかけていた。

「タバスコ？ いや、僕は」

「あたしチル。散歩のポで、チル」

ポテトフライをつまみながら、にかつと八重歯を見せて笑う彼女。

「チル。……え、散歩のポ？ サンじゃなくて？」

「あパフェ食べたい。パフェ食う」

僕を無視して彼女は店員を呼ぶボタンをすちやすちや連打した。

「えと、チル……さんは」

「ん、呼び捨てでいいよ」

「あ、うん。チルは、えっと……何歳？」

「それはオオカミ年齢で？ 女年齢で？」

「え、えっと……女年齢で」

「じゃあ、あんたと一緒」

僕の年齢を知りもしないのに、ピザをかじりながら彼女はそんなことを言った。適当に言ってるなあと思った。あと、もしほんとに僕と同じ年なら酒は飲んじゃまずいと思った。

「ていうかあの、チルは、本当にオオカミ女なの」

「ベッドの上ではオオカミ」

僕の質問も相当バカバカしかったとは思いうけど、それにしてもこの返しはどうだろう。僕は逆に感心した。

「あ嘘よ今の。あたし処女だし」

「はあ」訊いてない情報が飛び込んでくる。

「じゃ次あたし、質問する」

「え、うん」

「あんた壁の向こう行ったことある？」

「え？」

チルは手に持ったピザの耳をステーキ皿に押し付け、洗うみたいにごしごしステーキソースを擦り付け、ぽいと口に放り込んで喋り出した。

「あたしさ今まで色んな町行ってきたのね。生まれてから今まで。あ、これからも行くんだけど」

「旅芸人……？」

「んーん。見世物はこの町に来て飛び入りで雇ってもらっただけ」

「じゃあ、ただ旅してるの」

「うーん旅とかじゃねえけど」

「じゃあ何か目的が」

「あるっちゃあるしないっちゃない」

「え、どういうこと」

「うるせえないちいち。黙って訊いてろよブタ」

はつきり言っておくけど、断じて僕は太ってない。むしろ痩せてる。心の中で反論しながら、僕は黙った。

「それで……あー、もう何言うか忘れちった、くそ。てか遅え店員。パフェよこせ」

呼び出しボタンをすすすすすと連打しながら、チルは僕をぎろりと睨んだ。

「で、どうなの。行ったことあんの、ないの、壁の外」

「……………ない」

ない。

僕だけじゃない。

この町の人は誰も、壁の外に行ったことがない。

家族も、親戚も、学校の友達も、みんな。噂によれば一部の人は

——安易な言い方をすれば地位のある人は——壁の外へ行くことが出来るらしい。僕らは、出来ない。『出来ない』ではない。僕らはそれは『してはいけない』のだ。町の決まりで禁じられていた。固く。僕が生まれるずっとずっと前からだ。

小学校一年のとき。

僕は社会科見学で壁を見た。生まれて初めて目の前で見た。

とんでもなく大きくて、高くて、長くて、触ってみるとそれほどこまでも冷たくひんやりしていて、絶望なんて知らなかった小さい僕は、このとき確実に絶望を覚えた。

それから今まで、壁には近寄ってない。この町の人がみな、そうしているように、僕は壁の存在を避けて今まで生きてきた。この町では、そうするほうが楽だからだ。

唯一、僕らが壁を越えられるのは見世物小屋だった。壁の内側の人間にとつて、外から来たチルのような人は、来たというそれだけのことで十分見世物として成立していた。僕は、そういう外への憧れめいたものに無意識に吸い寄せられて、毎日見世物小屋へ通ったのかも知れない。急に、そんな気がした。

「壁の外には何があると思う？」

薄く微笑みながら彼女は尋ねた。

知らなかった。

いや違う。知ってる。知ってはいる。

外には他の町がある。他の市がある。他の地方がある。海があつて山があつて、テレビでしか見たことのない光景がある。でも。

「わからない」

僕にはそれが本当にあるのか、わからない。

彼女は、こくこくと小さく頷き「えーと」髪を手でくしゃくしゃやりながら、自分の服のあちこちをまさぐった。

「あ、あつた。あいこれ」

どん。彼女がテーブルの上、ピザとハヤシライスの皿の間に置いたのは、小さなカード状の紙だった。

【高橋珊瑚 八月十四日～八月二十三日まで滞在を許可する】

「……許可証」

「そお、きよかしょお。これでおまえ、そとでれる」

えらく棒読みで言いながら、チルはふんぞり返って両脚をテーブルの上に乗つけた。振動で皿が小さくかちゃんと鳴った。

「それは……どうやって」

「それ、この町に滞在するための許可証。それ、帰り際に見せて、返却して外に出る。つまり、それ持って、お前がその高橋なんちゃらのフリすれば、外、出れる」

ものすごい吐き気が胸にせり上がってくるのを感じた。悪い吐き気じゃない。興奮の、高揚の吐き気。

「あの、でもこの、高橋珊瑚っていう人が何か言ってきたら、ばれちゃうんじゃない」

「あーそれなら平気。こいつ死んでるから、てか殺した。すんませーん！」

乗つけた靴のかかとで、テーブルをばんばん打ち鳴らしながら、チルは大きな声を上げた。ほどなく店員がやってきた。チルはチョコパフェを三つ注文し、なら最初っから声出して呼びやよかったと舌打ち混じりに呟いた。

「殺したって、はは」少し笑ってしまった。

「ん？ へへへ」彼女も笑った。

「そんなわけないでしょ」

「お前がそう思うんなら、そうなんじゃん」

にやにやしながら彼女は、制服の胸ポケットから拳銃を取り出す。「あ」思わず声が出る。彼女はこれ見よがしに、それを僕の目の前でちやかちやか回し始めた。僕が撃たれかけた拳銃。

「えと……ほんとに、殺したの？」

「お前がそう思うんなら、そうなんじゃん」

そう言いながら、彼女は銃口をテーブルの許可証に向けた。

「これこいつ、この高橋なんちゃら、オオカミ女やる予定だった奴

なの。最初、見世物小屋行ったら雇ってもらえなくてさーあたし。オオカミ女いなくなれば雇ってもらえっかなーと思って殺ったら、まんまと。へへ」

楽しそうにぺらぺら彼女は喋った。

「それはつまり、お金が欲しかったってこと？」

「ま金だけじゃなくて寝床もね、うん」

「でもそれなら、殺して代わりに働くなんてしないで、普通に金持ちとか殺せばいいんじゃない」

「ださいじゃんそれ」

あ、価値観って人それぞれなんだな、と思った。

「とりあえず、その許可証やる。おごってもらったお礼」

「え、うん。え、おごり？」

「すんませーんなまぢゅー」

拳銃をしまいながら大声で追加注文するチル。僕は、許可証を掴み、ポケットにねじ込んだ。だいぶ落ち着いたつもりで、全然手は震えていた。これがあれば外に出れる。落ち着いて考えようとすればするほど呼吸が苦しく『僕の町では風がほとんど吹かない。壁に囲まれているから当たり前だ。風が吹けば桶屋が儲かるという諺があるが風の吹かない僕の町では果たして何屋が一番儲かるのか。そんな内容で作文を書き提出した中学一年の秋。受け取った国語教師の茶色い顔がみるみる赤くなり、僕はそこに秋の訪れを感じ』「おいタバスコ」

我に返る。ぱくぱくチョコパフェを食べながらチルが僕を見ている。

「……ん、あ、僕？」

タバスコという言葉が自分を指していることに一瞬気付けなかった。「どうしたのお前、ずっとなんかぼーっとしてたけど」

壁に掛かった時計の針は深夜一時半。テーブルの上は、チルが今食べてるチョコパフェ以外、全部空になっていた。

「えっと、ぼーっとしてたのは……癖、僕の」

「くせー？」

「ん、なんか、緊張というか……高まっちゃうと、どうでもいいこと考えがちで、僕」

「はあ、そう」

興味なさげに言いながら、チルはパフェの容器のふちとスプーンをぺろぺろ舐め「そいじゃあたしこれで」席を立った。

「あ、タバスコ。出るなら夜中がいいと思うよー。あたしは、そうだなあ、三時くらいに出るし。あと見りゃわかるけど、その許可証、期限今日までだから、出るなら今日しか」

チルは尖った八重歯を僕に見せ笑った。

「じゃタバスコ。またね」

深夜二時。

僕は自室で荷物をまとめていた。学生鞆に色々詰めた。

何を持って行けばいいか、よくわからなかった。携帯の充電器と、保険証と、好きな小説を二冊ぐらい鞆に詰めたら、もう他に必要なものがわからなくなった。折りたたみ傘を入れるべきかどうか迷って、微妙にかさばるのでやめた。風邪薬とか絆創膏を入れようと思って、でもなんだか出発前から体調崩すこと前提みたいで、気持ち負けしちゃ駄目だと思い、やめた。で、一ヶ月前に買ったノートパソコンを入れた。持って行かないと損な気がしたからだ。あと、下着を数枚。これはなんとなく。

結果、結構膨らんでしまった学生鞆を持ち、僕はゆっくり自室のドアを開けた。開けると、目の前に父が立っていた。

「どうした」

青い縦縞のパジャマを着た父は、パジャマに似合わない至極真面目な表情で、僕を見た。何もいいことが浮かばなかったので僕は、「ちよっと、行くところがあって」と、どうしようもない返事をした。「そうか」

父はそれきり黙った。何も言わず、動かず、ずっとその場に立っ

ていた。僕は父の体を避けながら、そろそろと廊下に出て、出来るだけなんともないような感じで玄関へ向かった。

靴を履きながら、部屋のほうを振り返る。父はまだ同じところに立っていた。立ったまま僕を見つめながら、ぽつりと呟いた。

「もしお母さんに会ったら、よろしく言っというて」

僕は言葉に詰まった。

母。

去年、母はこの家を出て行った。家を出て、町からも出て行った。母の生まれ故郷は壁の内側ではなかったと、それで知った。どういう経緯で外から来て父と知り合い結婚したのかは知らない。もしかしたら母は、チルみたいに見世物小屋の女の子だったのかも知れない。

「気をつけて」

父は僕がどこへ行くこうとしているのか、わかっていた。わかった上で、そんな言葉を僕にかけた。僕はただ、うん、と小さく返事をし、扉を開ける。夜の生ぬるい空気がじめじめ肌に絡みつく。僕は振り返らず、扉も閉めず、ただ走った。暗い町には僕しかいなかった。

そうして僕は壁を見た。

社会科見学の日以来だった。あのときより格段に背が伸びて、だつたら少し小さく見えるかも知れないと思っていたけど、壁は何一つ変わっていなかった。大きくて、どこまでも続いている、自分の住んでいる場所が普通じゃないことを否応なく思い出させた。

でも、あの日感じた絶望感は、今の僕にはなかった。

だって僕は壁の外に行ける。行きたいと思ったことは今まで一度もない。何も不満なく穏やかに暮らしてきた。でも、それでも、外に行けるとなった今、肺が痛くなるぐらい動悸がしていた。自分でも予想出来なかった自分の高ぶりが、怖かった。

向かって左右に、一つずつ扉がある。もののしさを微塵も感じ

させない、家の勝手口みたいな華奢な扉だった。「IN」「OUT」とそれぞれの上にプレートが貼ってあった。入口と出口が別々になっ
っているらしくて、ああ見世物小屋みたいだ、と思った。

「OUT」のほうの扉の前へゆっくり近寄る。この奥がどうなっているか、わからない。音も何一つ聞こえない。ポケットの中の許可証をぐっと握り締めて、扉を開ける。ほんのり薄明るい光が漏れてくる。中へ足を踏み入れていく。

部屋があった。

縦に長い、トンネルのような狭い部屋。全長は十メートルぐらい。蛍光灯数本で照らされているだけで、暗かった。

何より目についたのは、部屋の中央の踏み切りだった。形容じゃなく、本物の踏み切り。黒と黄色の遮断機。それが境界らしかった。向こうに、うっすら扉が見えていた。そして、その脇には人影。チルだ。

思わず近寄ろうとする僕の前に、にゅっと脇から手が伸びた。思わず息を飲み、そちらを向く。黒いスーツに身を包み、警察のに似た帽子を深く被った男が立っていた。気配がまるでなく、どこを見てるのか、帽子に隠れてわからない。おそろおそろ、その手の上に許可証を乗せた。中に入った途端、にゅっと手を差し出されたこの一連が、見世物小屋を出て「はい二千元」とやられたときの感覚と重なって、もしかしたら僕の町こそ巨大な見世物小屋だったのかも知れない、とぼんやり考えた。御代は見てのお帰りだ。

男はまじまじ許可証を見た。僕は、出来る限り、なんでもないような表情で彼を見た。見ていないといけない気がした。背中からこみ上げるような寒気がしたけど、歯を噛んで堪えた。

「……………け」

ほとんど聞こえないような音量で囁き、男が部屋の中心を指差す。遮断機？ 違う。

遮断機の横の壁。そこに貼り付いている、何か、小さな装置。それを指している。ゆっくり歩き近寄り、見た。

黒い箱だった。

「指を置け」

今度ははっきりと男の声。指？

「……指紋………？」

尋ねると、男は小さく頷いた。

——指紋認証装置。

「めんごタバスコ」

目の前にいるチルが、僕に言った。

「こういうのあるって、知らなくてあたし」

ぎゅわっと、頭がねじれた。雑巾みたいにありったけ絞られる感覚。

これを超えないと、僕は向こうへは行けない。でも超えられない。出られない。僕は外には行けない。数メートル先。あとちょっと。手を伸ばせば届く、この距離なのに。

あ。

本当の壁はここにあったんだ、と知った。

それから半ば無意識に、僕は震える指先を装置に乗せた。

じりりりりりりりりりりりりりり、じりりり。

けたたましいベルの音がトンネル内に響いた。それはもうひたすらに、何度も何度も聞いた見世物小屋のベルみたいで、ああ、僕はまた小屋の中に戻るんだと思って「はは」何もおかしいことなんてないのに、笑い声が勝手に漏れた。肩を掴まれる。振り向く。黒い男が、静かに僕を『笑うことが出来る生き物は世の中で人間だけだ』という話を聞いたことがあるけど、あれは欺瞞だ。一度だけ、僕はハエが笑うのを見たことがある。夏の暑い日、僕の食べかけていたカップアイスにとまったハエは、はははと笑った。僕は驚くより先に、つられて一緒にはははと『ぽん。ぷあん。あん。あん。ん。

音。

安っぽい音と、その音のひどい反響に合わせて、目の前の男の顔が散った。べしゃべしゃ熱い液を僕の顔に撒き散らしながら、男は

真後ろにぶっ倒れた。ベルはいつの間にか鳴り止んでいて、静かなトンネル内には、男のどこから出るごぼごぼという音だけが響いていた。

「うえええあたしだっせええええええええええ」

チルの絶叫が男の音を掻き消した。

「こういう、こういう殺しだけは、絶対やりたくなかったのにい！

ああくそ！ 死ね！」

ぱんぱんと二回音がして、倒れている男の体がびくんびくんと二回跳ねた。これで男は三回死んだ。油田を発掘したみたいに噴き出す血を見て『サラダ油と原油の違いは』とか、またどうでもいいことを考えだしそうになる手前で、堪えられず僕は吐いた。御代は見てのお帰りだ、とぼんやり思った。

どうせ本物にならない贋物の町

書を捨てよ町に出ようとか何やら有名な人が言ってたけど僕は書を持って町から出てきてしまったのできつとその人に怒られると思う。学生鞆に詰めて持ってきた好きな小説は、朝になって改めて見ると自宅を思い出してしまつて、持ってこなきゃよかったと少し後悔した。

僕らは、ぎらぎらした夏の朝日が一切照り込んでこない、ビルとビルの暗い隙間にいる。本を読む僕の隣でチルは腕を組み、壁にもたれて眠っていた。寝息ひとつ立てず、ぴくりとも動かず、なんかツタンカーメンみたいだった。

今いる路地の入り口から向こうに広がるパノラマ、町の光景。初めて見る僕の町以外の町は、僕の町と大差なかった。家がある、コンビニがある、人が歩いて車が走る。でも、壁がない。そのたった一要素がどれだけ僕を寝かせなかったか。一睡もしてない。壁の中で、吐いたあと、扉を開けて、目の前に広がった夜の町。生まれて初めて肌を感じた強い風。寝れるわけない。あと、今いる路地は狭くてアスファルトは硬くて生ゴミみたいなにおいも漂つてて、そういう物理的な意味でも寝れるわけなかった。

「おい今日何曜だ」

鋭い声。見るとチルが目を大きく開き、僕を睨んでいた。

「え、あ、おはよう、今日月曜」

「出たっ！」

がばつと立ち上がり、座っている僕の脚を踏みつけ「いたっ！」チルは走って町へ消えていった。

残された僕は、とりあえず、おなかが減った。腕時計を見る。午前九時前。血の染みが付いたシャツを脱ぎ、表裏逆にして着なおした。

目の前に並盛。

朝から牛丼しかもこっちは徹夜明け、というのは想像以上に胃にきた。いや、食べたくて頼んだんだけど。

奥の厨房でなにやら一人で作業している店員に、ああ、この人は外の人なんだなあすごいなあと、無意識に暖かい視線を送ってしまった。そのタイミングで急に眠気が始めて、そうかこれが安心感かなどと考えつつ割り箸を割る。七味を振り掛ける。頬張る。味が広がる。そして噛む。

ふにゅつとした。

「ふにゅつとした……」

肉は間違いなく肉なんだけど、ごはんが違う。柔らか過ぎてすぐ口の中で溶けて噛んでる感覚がない。肉を箸で捲ってごはんを見る。確かに米だ。口に入れる。ふにゅつ。なにこれ。

「……あのー」厨房に声をかける。

店員が手を止め、無言で僕の前へ来る。

「あの、これお米、なんか、お米じゃない感じなんですけど」

「はい、お米じゃないですけど？」

「え、違うんですか」

「はい、違いますけど？」

「じゃあ、なんなんですか」

「え？ 𦵑米にせこめですけど？」

店員は首を傾げて妙な顔をした。僕も同じように首を傾げ妙な顔をする。全然わかってないけど「はあ、わかりました」ととりあえず言って、朝食を再開する。𦵑米と呼ばれたこの柔らかいのは、ふにゅふにゅするわりにおなかに溜まった。胃は満たされたけど、心のどこかが満たされない食事だった。

さっきいたビルの隙間に戻ると、チルがうつ伏せに寝転がって雑誌を読んでいた。正直、ほっとした。僕はチルの連絡先を知らないので、もしかしたらもう二度と会えないんじゃないかと思ってた。

でも多分会えるとも思ってた。結果会えたので、まあ、どうでもいい。チルの隣に座る。

「おかえりチル、あと、ただいま、うん」

彼女は僕に銃口を向けた。

「おい話しかけんな」

僕は頷き、おとなしく黙った。

ちらっと彼女の読んでいる雑誌を覗き見る。なにやら目とかオーラがキラキラした少年少女が描かれていた。少女マンガだ。少女マンガの中でも断トツで少女マンガくさい少女マンガだ。これは。

これは、チルに似合わない。……ドン。

チルが上空に向けて発砲した。この至近距離で聞いたその音は僕の耳と心臓を高『ドン』という音で思い出すのは運動会。中学二年時僕は障害物競走に出場したのだが、ともすれば人生はそれに似ているかも知れない。網をくぐりパンを食い飴を探してハードルを飛び借り物をして結婚をして雨が降りびしょ濡れになりながらそれでも笑顔でゴールテープを『んだこれ！ 違うこれ！』

ばんと雑誌を地面に叩きつけるチル。現実に戻る僕。

「違うって、何が違うの？」

「全っ部！ 先週までお供の王子七人いたのにいきなり三人になっ
てんの！ あたしのセバスチャンが消えてんだよ！ 返せよ！ て
か話もおかしいし！ 仲本姫は国際展示場に幽閉されてただろ？
んがなんで今週いきなりベガスで裏カジノ経営してんだよ！ 話し
繋がってねーだろうが！ おいこれ殺すぞマジでおいタバスコ！」
物語の世界観が見えないけど、チルの怒りはよくわかった。僕は、
アスファルトの上でぐったりしている雑誌を拾い上げ「チル、これ」
表紙を見せた。

『週刊 贗^{にせ}マリーゴールド』

チルは急速に怒りをトーンダウンさせ、きよんととして、

「しゅうかん、貸し、まりーごーるど？ なに貸して。あたし借りてないよ？ 買ってきたよ？」

口をとんがらせ、困ったような上目遣いで僕を見た。その表情がやたら可愛かったので、思わず携帯を取り出して写メを撮ったらチルは「ん？　へへ」と意外とまんざらでもなさげにVサインをしてきたのもう一枚撮った。僕たち何やってんだろうとちょっと思った。

「はい、贋ですけど？」

チルが雑誌を買った本屋。店員は、妙な顔をして僕らを見た。

「贋って、本物じゃないってことですか？」

「そうですけど？」

「なんで本物を売らないんですか？」

「贋だからですけど？」

さっぱり話が進んでいかない。店員はひとまず放っておいて、僕は後ろを振り返る。

チルが小さな女の子のおでこに銃を突き付けていた。

「金出せ」

僕は彼女の手を握り拳銃をゆっくり下げさせしまわせて「ごめんね、なんか」女の子にお詫びをし、チルを引っ張り店から出た。

「だってー本買ったら文無しになっちったんだもんー」

ぶうぶう頬を膨らませながら本屋脇の地べたに座り、あぐらをかいて片膝を立てるチル。派手に捲れるスカート。丸見えになるスパッツ的なやつ。それをちらっと見たり目のやり場に困ったりしながら、

「だからってあんなちっちゃな子脅さなくても」

「だって大人脅すのださいじゃん」

僕は人を脅したことがないのでなんとも言えないけど、彼女がそう言うならそうなんだろう、ださいんだろう。僕は深く頷いた。

「あの」

突如、背後から細い声。振り向く。さっきの女の子が立っていた。焦る。焦りながらも、少し落ち着いてしっかり見てみる。ふわふわ

ウェーブした茶っぽい髪と純白のワンピース、人形みたいに整った目鼻立ち。小学校高学年ぐらい？　とにかく育ちが良さそうだった。「あ、えーっとさっきはあの、ごめんね。あの、さっき見た銃、ピストル、のことはちよつと、あー、黙っておいてもらえれば、お父さんとかお母さんに内緒で、うん、ほら銃刀法違反とか色々、はは」口が勝手にべらべら動いた。女の子はとても冷静に、

「お兄さんとお姉さんって本物ですか」

と訊いてきた。幼い見た目にそぐわない哲学的質問に、僕は面食らった。チルはというと、座ったままかちやりと銃を掲げ「金出せ」とまたやり始めた。あきらめない心は大事だけどTPOはもっと大事だと思った。

僕の隣で、チルはそれこそオオカミのような勢いで、テーブルの上に並ぶチョコケーキを食べ続けていた。もう一ダースは食べてると思う。向かいに座る女の子は、静かにその様子を見ていた。

女の子に連れられて入った小さな喫茶店（少女の行きつけの店だそうだ）つまり今いるここは、しっとり落ち着いた大人な雰囲気、ジャズとか流れてたりして、僕は場違い感にそわそわしっぱなしだった。そんな僕の向かいで、女の子はゆっくりホットコーヒーに口を付けている。それを見ながら僕は、メロンソーダをストローでちゅうちゅう飲んでる。少し自分が情けなくなった。

「なんかこのケーキすげえふにゅつとしてるう」

舌を出し、口の周りに付いた茶色いクリームをぺろぺろしながらチルが言う。ふにゅつとしてるんだ、じゃあきつとこれも「贗物だからですよ」と、女の子が僕の思考を先取りして口にした。

「その……贗物っていうのはさ、なんなの？」

「私、針子はりこっていいいます」

「え？」

「名前です」

「え、ああ、あうん」急過ぎてびっくりした。「僕はあの」

「あたしチル、こいつタバスコ、これチョコケーキ」

チルが僕とケーキの分まで自己紹介してくれた。気が利く。

「で針子ちゃん、えっと、贗物っていうのは、なに？」

「全部です」

ざっくりだ。もう少し詳しく聞きたい、と思った矢先「もう少し詳しく話します」と、針子ちゃんがまた僕の思考を先取りし、話し始めた。小さな小さな声で。

食べ物とか本とか人とか、この町のものは全部贗物です。全部です。車はガソリンじゃなくて石油で動いて、先生はたぬきが化けてるんです。友達みんな人形だし、太陽は空に穴が開いてるだけなんです。それに――お父さんとお母さんは贗物の妹が生まれてから、私のことはほったらかしです。きつと妹に贗物にされちゃったんだと思います。きつと私ももうすぐ贗物にされます。だから逃げてきたんです。助けてください。お願いします。だってお兄さんとお姉さんは。

「本物ですよね？」

僕は言葉に詰まった。

針子ちゃんの話が、なんだか『思春期特有のありがちな妄想』に聞こえたからだ。いや、妄想じゃないことはわかってる。だって今、僕が飲んでるメロンソーダはものすごく葉っぱのにおいがする。これは間違いなく贗物だ。でも、この贗物と、彼女の言うニセモノは、何か、どこかが、決定的に違う気がした。

「タバスコそれちょーだい」

チルが言いながら僕のメロンソーダを引ったくり、勢いよくちゅうちゅうやりだした。針子ちゃんのこととはまるで無視。あつという間にずずと飲み干し口を離して「うーんゲロの味するこれ」とか言い捨て、チルは席を立った。

「え、どこ行くのチル」

「ここではないどこか」

詩人みたいなことを言う。

「えチル、針子ちゃんの、その、お願いというか、聞いてあげないの」

「聞かねーよおアホくさい」

針子ちゃんが慌てて立ち上がる。

「お姉さん、本物じゃないんですか？」

それを聞いてチルは針子ちゃんの背後へ素早く回り、華奢な肩に腕を回して、ぐっと体を寄せ、

「ごちそーさんお嬢ちゃん。お金よろしくう」

ぷにぷにと少女の頬を指で押すと、さっさと離れて歩き出した。

「お姉さん！」

カラコロカラコロというドアベルの涼しげな音と共に外へ行ってしまうチル。

残された僕は、ぽかんとしている針子ちゃんと、開け放されたドアを交互に見ながら、

「えと、ごめん、あの、頑張っ！ うん！ 頑張れ！」

と無責任な上になんの意味もない言葉を少女にかけ、立ち上がり、走り出す。

「お兄さん！」

針子ちゃんの声を背に、僕は店の扉をカラコロと閉めた。

「全部ニセモノなんだーよく出来てんなあー」

僕の前を歩くチルは、目につくものをひたすら殴り蹴りしながらすたすた進んで行く。殴られた電柱は大きく傾き、蹴られたガードレールはバキッと割れた。本当に全部贋物らしい。ふと立ち止まり、しゃがんで、足元のアスファルトを思い切り殴ってみる。

「痛あつ」

完全にアスファルトだった。全部贋物じゃなかったのかと、少し嬉しいような騙されたような気持ちになる。指の関節がじんじん熱い。

「タバスコ、今からおもしれーことするから、見てて」

僕の痛あつの声で立ち止まっていたチルが、うずくまる僕を見下ろした。アングルのにちょうど逆光になっていて、表情はわからない。チルはいつの間にか手に持っていた携帯を、かちかちやり、耳にあてた。

「え、チル、それチルの携帯？」

「違うよ」

「じゃあ誰の」

「あたしではない誰か」

また詩人みたいなことを言う。ほどなく、

「あ、もしもーし。お父さんですか？ あたし、あんたの子供誘拐しました。ハリコちゃんってお嬢ちゃん」

電話口に向かってすらすら喋るチル。誘拐？ 針子ちゃんを？

「言っとくけど嘘じゃねえよ？ だってわかるよねこれ今、ケータイ、そう、あんたの子供のケータイからかけてんだからさー。誘拐したって動かぬ証拠。じゃガキ殺されなくなったら金用意してねえっと」

チルは一気にそこまで言うと、通話口を手で押さえ、しゃがみこんで僕の顔を見た。眼光が鋭い。

「……いくらがいいと思う？ タバスコ」

「え？」

「金」

「えと、てか、その携帯」

「あのガキの。スったの帰り際に」

「いつの間に……」

「生きてくためには大道芸もスリの技術も必須科目。覚えとけ」

「はあ」覚えとこう。「でもチル、にしても狂言誘拐はどうだろう」

「うるせーなあ早く金額決めろブタ。お父さん待たせてんだぞ受話器の向こうで！」

脅迫の電話かけという気にならずに思える。礼儀正しいんだかなんだか。

「あーもうめんどくさ、お前喋れ！」

ぐいっと携帯を耳に押し付けられ、無理やり手に持たされる。

「え？ あえ、えっと、お、お電話代わりました、あの、初めましてタバスコです、ああいやこれは本名でなくて『本名が本当の名であるなら本命は本当の命。中学三年時、僕は部活の後輩から本命チヨコと呼ばれる菓子を貰った。小ねずみのような顔をした後輩。彼女の命を僕は不覚にも学生鞆の中で溶かしてしまう。鞆には彼女の甘い命の香りが染み付いてしまい罪悪感で胸焼けがした。以来僕はチヨコレートは食べれ』あ」

我に帰る。どうでもいいことまで喋ってしまった。ゆっくり深呼吸を二、三回する。耳に意識を集中する。

電話の向こうの人物——針子ちゃんの父親は、全く、何も言っていなかった。無言。無音。違和感を覚えるも、チルが早く言えとばかりにぶんぶん手を振り回し、噛むぞとばかりに尖った八重歯を見せ付けてくるので、僕は、

「お金は五百万でお願いします」

比較的妥当っぽい額を、丁調にぶつけてみた。チルを見る。「はっぴやく！ はっぴやく！」と小声で連呼している。魚市場ここは、とか思いつつも「すみません、やっぱり八百万でお願いします」と訂正しといた。チルを見る。こくこく満足げに頷いている。

それから数分、沈黙が続いた。

どきどきしながらも、ここで先に喋ると負けだとなんとなく思い、相手の出方を待った。普通の歩道の真ん中でしゃがんで電話する僕らの横を、何人もの人が通り過ぎていった。陽射しがじりじり、僕らの背中を焼いた。

唐突に。

「いませんけど？」

受話器の向こうで低い声が言った。

「いないって、何がですか？」

「娘がですけど？」

「え？ いや、針子ちゃん」

「知らないですけど？」

「え？」

携帯を耳から離し、ディスプレイを見る。『お父さん』という文字。もう一度、携帯を耳にくっつける。

「お父さん、ですよね？」

「違いますけど？」

「え？」

もう一度、携帯を離す。『お父さん』という文字。耳にくっつける。

「いや、お父さんですよね？」

ぷー、ぷー。

電子音。

通話が切れていた。

「どうだった？ 振り込むって？ それとも受け渡し？ アタツシユケース？」 ふんふん興奮気味に鼻を鳴らすチル。

「えっと、その……お父さんじゃないって」

「あ？」 口を丸く開くチル。

「違うって、言ってた、なんか。うん」

うまく説明出来ないけど、とにかく、そのままを伝えて、携帯を閉じてチルに手渡した。

チルは「……ふうん」と小さく言い、黙り込んだ。それからしばらくして「八百万、高過ぎたんだな」とつぶやいた。高過ぎただろうか？ 仮に高過ぎたとしても、高過ぎたからって、お父さんがお父さんじゃなくなることがあるだろうか？ それとも。

僕が喋ったのは贗物だったんだろうか。

そうであったほうが、いいような気がした。

「お兄さん、お姉さん！」

声。

振り向くと、針子ちゃんが立っていた。睨んでいた。

「私の携帯電話、返して下さい。盗みましたよね？ 喫茶店で」

ぽいとチルが少女に電話を投げた。「あっ」慌ててキャッチする針子ちゃん。

「ねえ嬢ちゃん、それに入れてあるお父さんって名前の人、お父さん？」

当たり前のことを質問するチルに対し、針子ちゃんはむっとした様子で、

「見たんですか？」と言った。

「見たし電話かけた」とチル。

「え？　なんでかけたんですか」

「調査。ほんとにニセモノかどうか」

チルはそこまで言って、立ち上がり、ぱんぱんとスカートを払った。それからぼさぼさの髪の毛を手で掻いて更にぼさぼさにし、

「ハリコ。お前の親父、ほんとにニセモノだったよ。あと、お前、ホンモノ。良かったじゃん」

と言った。針子ちゃんは、意味がわからないという顔でチルを見ていた。

それから。

チルは針子ちゃんに、父親の勤務場所を訊いた。「郵便局です」と針子ちゃんは答えた。「じゃタバスコとハリコはここで待ってて」とチルは言い、どこかへ行った。僕と針子ちゃんは言われたとおり、なんでもない普通の歩道の真ん中で、じっと待った。待ってる間、針子ちゃんは「なんでこの町には贋物ばかりなんですかね」と、ぼつりつぶやいた。「僕の町には壁ばかりだったよ」と、答えになっ
てない答えを返すと針子ちゃんは「そういう感じなんですかね全部」と、ぼんやりしたことを言った。全部だったら嫌だけどそれはそれで面白いなど、ぼんやりしたことを思った。

「ただいまあ」

帰ってきたチルの制服はトマトジュースを吐いて垂れて染みが出

来たみたいになっていて、確かめるまでもなくそれは返り血だった。
「もうこの町に用ないからあたしら出てくけど、ハリー来る？」

「ハリー？」

「かつこよくね、そっちのが」

けらけらとチルは笑った。針子ちゃんは少したってから、一緒になつてくすぐす子供みたいに笑った。

「あ、ね、タバスコ」

「え？」

チルが近寄り僕の肩に手を回し、耳打ちしてくる。

「一パーセントだけ、ぶんどってきたよあたし」

「なにの」

「お前が要求した額の」

チルは、にへらつと笑いながら制服の胸ポケットから八枚の紙幣を見せた。指先や爪の間に赤黒いのが付いていて、紙幣よりそっちばかり見てしまった。

「……そういうやり方は、ださいんじゃないの？」

「ださいよ。ださいから、この金で新しい服買っておしゃれ決めこむ」

精神的だささと外見的だささの境目が僕にはよく判らないけど、確かに新しい服は買ったほうが良いと思う。捕まりかねないし。

「あとチル、顔洗ったほうがいいよ。付いてる、ほっぺたとかに血」
そう注意すると、チルは銃を取り出し、僕のこめかみに当てた。

そして耳元で「この距離で撃つとすげえのよ。はじけるの」と囁いた。ので、「はじけるんだね」と気のない返事を返すとチルが「ねねね、はじけた記念に写メ撮ろうぜ」とかい出し出すので、携帯を取り出し構えると、チルがぐいぐいほっぺたをくつつけてきて、結構どきどきした。シャンプーの匂いとかしたら更にどきどきしただろうけど、わりとゴミみたいな匂いがした。「最後にお風呂入ったのいつ、チル」「オオカミ女になる前」それはまずいと思いながら、ぱしゃと写メを撮る。僕らを見上げる針子ちゃんがすねたような顔

をしているのを見て、僕らはしゃがんで針子ちゃんの高さに合わせて顔を並べる。「ホンモノいいーい」チルの声を合図にもう一枚、ぱしゃと撮ったその写メに、

『外で、僕はホンモノになりました。タバスコ』

という文を添えて、父に送信した。

父さんが喜んでくれますように、とか考えて、あタバスコって書いたけど意味わかんないだろうな父さん、とも考えて、それがなんだか面白くて僕は一人でくすくす笑いながら、鞆の中から小説を取り出し道路に思い切り投げ捨てた。石油で動く賸物の車がすぐにそれを轢いていった。ああ、これで僕はやっとな書を捨てた。それなら次は。

「町に出よう」

思わず口に出してしまった僕の言葉に、

「うん、出よう」

チルは笑顔で答えてくれた。

ほとんど眠れない町の夜

「重っ」

と思つて、思つてというか声に出して、目を開けるとチルが僕の上に馬乗りになっていた。

「何やってんのチル」

「お前に乗ってんの」

僕を見下ろし、口元を緩ませるチル。

曇った夜。蒸し暑くて、でも寝れないほどじゃない空気と湿った風。

「なんで乗ってんの」

「地面ちくちくして寝れねーからお前の上で寝ようかと」

周りを見る。街灯二個しかない小さな公園。僕が寝てるのはその端っこの草陰だ。自分のいる場所も忘れてがつつり寝入るほどに、僕は寝不足だったらしい。意識がはっきりするにつれ、腰と背中がちくちくしてきた。頭もふらふらする。まだ眠い。

「僕の上で寝るって、どうやって寝るつもりなの」

「どうやってってこうやって」

言いながらチルは、ゆっくりと僕に覆い被り、強く抱き付いてきた。「え」思わず声を出す僕の真横にチルの顔。頬に当たるチルのつんつんした髪。体に当たるチルの胸の膨らみ（控えめな大きさ）。チルの体温、息、重さ、汗の匂『体温なんて所詮まやかした。人に流れる熱い血の温度を数字という冷たい概念で塗り固めようなんて狂気の沙汰』とか意識が吹っ飛びそうになりながら、自分の内股を力いっぱいいつねり上げ、なんとか気を保つ。

「あのチル、何これ、え、夜這い？」

「お前がそう思うんなら、そうなんじゃん」耳元にあったかい息が当たる。鳥肌が立つ。

「そうなんじゃんって、え、なに、なんで急にそんな」

「急じゃないレイプとかあんのか」

正論をぶつけられた。納得した。いや、してない。それよりもレイプというダイレクトでバイオレンスな表現に頭がぐらぐらした。

「てかあの、チル、そこ、寝てるんだよ針子ちゃん、ほら」

すぐ脇のベンチの上を指差す。針子ちゃんが猫みたいになくなつて寝ている。すうすうと微かに寝息も聞こえる。

「うん、よく寝てんね」

「寝てるんだから、その隣でこんな、こういう変なことはその」

「じゃ起こしてすればいいの」

「あいや、そういうことじゃ」

ちろっ、と突然、首を舐められた。「いわ！」思わず上ずった声が出る。「ふ、へへへ」チルは小さく笑いながら銃を取り出し、僕の口に思いつきりその先をねじ込んだ。「あごっ」奥まで深々入れられて、吐瀉く僕を楽しそうに見つめるチルの尖った目は、この暗い公園の中で今一番光ってるんじゃないかというくらいぎらぎらしている。オオカミだ。ほんとにオオカミだったんだ。迂闊だった。

チルが銃を握っていないほうの手で、制服を脱ごうとし始め『脱衣所』という言葉があるけど脱衣だけじゃなく着衣だってそこでするだろうと幼い僕は『頭をぶるぶる振って現実に戻ってくる。片手だけじゃ上手く脱げないらしく苛々した様子でチルが「タバスコ、脱がせ」と命じてくる。この状況の打開策が見当たらず僕はただじっとする。引き金にかかるチルの指が微かに動いたのが見え、あ、撃たれる『打つ撃つ討つとウツ』という字は攻撃性が強いけど僕が思う一番攻撃的なウツはやはり鬱という字の字画の多さ』ぐりいっと内ももをちぎれるくらい強くつねって現実に戻る。おそろおそろ手を伸ばし、チルの制服のすそを掴む。震える手でゆっくり捲くり上げていくと「いいよ別に破いちちゃって」とチルが囁く。全然手に力入らないのに出来るわけないので、そのまま捲っていく。ピンクくてリボンとか付いたやたら可愛いブラが見えた辺りで僕は目を瞑った。幸いにも目を開けるとは強要されなかったので、瞑ったまま脱が

せていく。チルの体が少し大きく動いて、布っぽい音がして、ああ全部脱いだんだとわかる。もっと強く、目を瞑る。

「タバスコさ、町出てからずっとあたしについてくるけどなんで？」
不意にチルが訊いてきた。なんで今そんなことをと思いながら、答えようにも口にねじ込まれた銃のせいで答えられない。もし口が動かせたとしても「ね、なんで？　なんでずっとついてくんの？」その理由は僕にもよくわからないので、結局答えられないだろうと思った。「……へえほふ？」迷惑？　と訊いたつもり。「ううん別に全然」伝わったらしくチルはそう答える。「前、あたしの目的訊いたでしょタバスコ。あたしが旅？　旅じゃねーけど、してる目的小さな衣擦れの音と、草の音。「あるっちゃあるしないっちゃうないんだけど、ある体で言う結構あるんだけど、たとえばいっぱい面白いもん見たいとか、いっぱい美味しいもん食いたいとか、いっぱい色んな奴撃つてみたいとか」ずるっ。胸の上らへんまで服を捲くられる。風が肌に触れ、すぐにしっとりした柔らかいもの（見てないけど十中八九チルの肌）が僕の肌にくっついた。「いっぱい人に会いたい、いっぱい金欲しい、じっとしてたくないし、つまらない町でくたばりたくないよね」歌うみたいに軽やかに囁くチルの息と温度。「色んな町があって色んな食いもんがあって色んな人がいて色んなバカくさいことがあってあたしがいてお前がいて風も吹いて雨も降って足さえあればどこにだって行けてだから世の中こんなに超楽しいんだね、だろタバスコ」「うん」「あたし言ったこと全部覚えといてね」「うん」本当に楽しそうに言葉をつるつる紡いでいくチルに、意味もわからずただ圧倒されながら、でもだんだん僕も楽しくなってくる。経験ないから知らなかったけど、抱き合うって肌貫いてこんなに気持ちとかがんがん伝染してくるんだかと思って、眠気なんてとくに覚めきってた。「あのさチル」目は閉じたまま口だけが動く。「僕、家、町、出てくるとき、正直、ちょっと、迷った」「そおなんだ」柔らかいチルの声。「でも良かった。と思ってる今。出てきて。壁。多分これからも何回か、何回も、思うと思

うけど、良かったって」「それじゃあたしもそう思う」「うん……あれ」喋れてる。銃嚙んでない。と、気付いて二秒後に。ばあん。

何度か聞いたけどまだ慣れないその破裂音に僕はぎゅっと強く目『撃たれたのは誰でしょうクイズ。A、針子ちゃん。B、僕。C、チル（自殺）。D、野良猫。E、他の誰か。F、くだらない星空。予想。本命A、大穴C、まさかのB、妥当なE、見たくないD、そもそも今日は曇ってるF』「ああああああーあ！　うわすげえ冷めた。くそ」次いで舌打ちが聞こえた。

はっとする。体が軽くなってる。がさがさと草の音。「ふあ」チルのあくび。衣擦れの音。「ふああ」またチルのあくび。それから、静寂。微かに風の音とか虫の声。

目を開けるタイミングが掴めずじまいのまま、すっかり静かになってしまったので、とりあえず、ゆっくり薄目を開けてみた。当然まず夜空が見えた。横を見る。背中。

「え？」

制服を着たチルが、僕に背を向けて横になっていた。おそろおそろ体を起こし、顔を覗き込んでみる。ありえないぐらい穏やかな表情で寝ていた。「え？　チル？」「うるせえな寝ろブタ」目を瞑ったまま、ほとんど口も動かさず言うチル。「……うん」おとなしく、寝ることにする僕。

ゆっくり立ち上がり、軽く背伸びをしてみる。じめつとした風。心地よくはないけど、でも出てきて良かったと、ゆっくり思いながらチルを見る。さっきまでオオカミだったのが今はもう子犬みたいに小さくなっていて、ちよっと笑えた。そのチルの横に何か見える。何か。何か。何『撃たれたのは誰でしょうクイズ正解はE、他の誰かでした』

翌朝。

「覗きだよ覗きい。マジ趣味悪いし気色悪いい」

髪をくしゃくしゃしながら、チルは隣に転がるE、他の誰かを蹴飛ばした。その拍子に、他の誰かの撃たれて潰れた頭の中から何かがたらつと垂れたのが見えて、僕の腹から熱い何かがこみ上げてきた。つまり吐いた。

今日も、また寝不足。

八月十四日、昼のフィクション

僕は自室にいる。

自分の家の、自分の部屋。

昼。カーテン開けっ放しの窓から、光が思い切り射し込んでくる。夏。

夏休み。

高校一年生の夏休み。

僕は鞆に荷物を詰める。学生鞆。

携帯の充電器と、保険証と、好きな小説を二冊。一ヶ月前に買ったノートパソコン。あと、下着を数枚。終わり。

ほどよく膨らんだ学生鞆を持ち、僕はゆっくり自室のドアを開けた。目の前に父が立っていた。

「どうした」

青い縦縞のパジャマを着た父。明るい午後の日差しはその姿とあまりにミスマッチで、僕は少し笑ってしまった。

「母さんに会ってくる」

「そうか」

父は短くそう言った。

「日曜だからって昼までパジャマのままってどうかと思うよ父さん」
「会ったら、よろしく言っというて、母さんに」

僕の言葉と全然噛み合わないことを言う父。とりあえず僕は頷き、父の体を避けながら廊下に出て、玄関へ向かった。靴を履きながら、部屋のほうを振り返る。父はまだ同じところに立っている。

「それと、向こうの旦那さんにも、よろしく言っというて」

僕は言葉に詰まった。

詰まりながら、ただ、うん、と小さく返事をし、扉を開ける。生ぬるい風が吹き抜けた。僕は振り返らず、扉も閉めず、走った。

風が強く吹く。

涼しくはない、じめつとして心地悪いけど、でも風が吹いている。駅に向かう途中、通りがかった神社。境内へ向かうまっすぐな長い長い道の両端に、ずらりと屋台が並んでいた。ああ、今夜は祭だ、と初めてそこで気がつく。『去年までは家族三人で来てたけど今年は』と考えて、すぐに忘れようと頭を軽く振ったりする。去年は去年で今は今。遠くを見る。立ち並ぶ屋台の一角に大きな建物を見つけて、見世物小屋が今年も来たんだと思う。去年は何が出てたっけ、タコ女？ 見てないけど『母さんが見たがってたな』と考えてまた頭を振る。全部忘れて、僕は駅へ走る。

ホームに立つ。人は少ない。きっと夜になったら祭を見に来る客でいっぱいになる。昼のこの時間に出てきてよかったと思いつながら、ポケットから切符を取り出す。

期間、八月十四日～八月二十三日。

往復切符だ。十日間、向こうにいるつもりで買った。でも、どうなるかわからない。もしかしたら僕はもう、こっちに帰ってこないかも知れない。十日先の自分がわからない。

ほどなく、電車がやって来て、乗り込んだ。がら空きだった。帰省ラッシュと違ってまだまだ後だっけ、とか考えながら、電車で揺られた。数分走って短いトンネルに入り、ものの数秒ですぐ向こう側に出た。それでもう、僕は僕の町の外へ出ていた。

壁はない。

窓の外に流れる知らない町の知らない風景を見ながら、父をなんとなく思う。

僕は父に「日曜だからって昼までパジャマのままってどうかと思うよ」と言ったけど、あれは的を射てない。父は、日曜以外も昼までパジャマのままだからだ。昼まででもない。一日中だ。母が出て

行ってからすぐ仕事を辞めてずっとそんな感じで、「日曜だからって昼までパジャマのままって云々」っていうのも、まあ嫌味のつもりで僕は言ったんだけど、それも全然父には効かなくて、なんだか体は家にいるけど心はどこか遠く知らない町に行っちゃったみたいだった。この一年間。

窓の外の風景をぱしやと適当に写メに撮って、父に送る。本文には何も書かなかった。送信してから改めてよく見たら写真はものすごいぶれぶれで、何が写ってるか全然よくわからなくて、ちよっと笑えた。

で、気がつくと、僕はドアの前に立っていた。ドアの前に立つてようやく気がついた、というか。

母が住む団地の一室、その白くて華奢なドアの前に立って、このタイミングでようやく現実味が押し寄せてきた。

『ああ、来ちゃったんだ』

現実味ついでに、ついだって言うのもなんだけど、自分の今いる場所をゆっくり確認する。ゆっくり深呼吸しながら。

思ってたよりずっと大きくて、綺麗な団地だった。八階建て。母の住む部屋は五〇三号室だっていうから五階だと思ってたら四〇なんとかっていう部屋番号がごっそり丸々存在してなかったの、繰上げ？繰り下げ？で、ここは四階だった。なんかそういう変に縁起を気にする感じが団地団地してるというか、平たく言うとなんか自分の家じゃない感覚ががんだんした。

母はいるだろうか。

ドアの横の壁。そこに貼り付いている小さな装置。黒い箱。言うまでもなくインターホンだけど、それを見ながら、まだ指をその装置に押し当てることが出来ないまま、じっと考える。

いるだろうか。

今日行くことは伝えてある。あるけど、時間までは言っていなかった気がする。ゆっくり指を黒い箱に当てて。もし、母の新しい父（

変な言い方だけど）が出てきたらどうしよう。どんな顔すればいいだろう。ごちゃごちゃの頭で、指を押し込む。

押し込んだまま、止まり、待った。

五秒、四秒？とにかく想像をはるかに上回る早さで、かちゃかちゃ音がして、ドアがじわっと開いた。あまりの早さにやられて頭が真っ白になった僕は、

「あ、あの、こんにちは」

気の抜けた挨拶をしてしまった。久々に会う母にこんにちは。初めて会う母の再婚相手にこんにちは。どっちにしても相当間抜けなこんにちは。

「……こんにちは」

びっくりした。こんにちはが返ってきた。けど、それよりびっくりしたのは、返してきたのが、母や再婚相手じゃなかったことだ。

半開くドアの先に見えたのは、女の子。

白いセーラー服、大きな赤いネクタイ、やたら短いスカート。薄汚れた制服から覗く白い肌。短めの髪。ボサボサしてツンツンはねた髪。目は大きくて鋭く尖ってて、変にぎらぎら光っていた。

のろのろドアが開いていき、半開きから七分開きぐらいになったところで、僕は気が付く。

彼女の制服は、トマトジュースを吐いて垂れて染みが出来たみたいになっていて、確かめるまでもなくそれは。

「……血？」

「……………タバスコ」

こぼしちゃってピザ食べてて、とかなんとか、控えめに彼女は呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4132n/>

ノンフィクション・タバスコサイドショウ

2010年10月8日11時23分発行